



19世紀オランダ帝国主義文化のなかでの日本

スーザン・ルジューネ
塚原, 東吾

(Citation)

日蘭学会会誌, 25(1):69-90

(Issue Date)

2000-10

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003684>



19世紀オランダ帝国主義文化のなかでの日本

スーザン・ルジェーネ 著・塚原東吾 訳

1815年以降の、オランダの近代的国民国家の形成

1824年に、ヤン・コック・ブロンホフは、日本からオランダ本国への二回目の帰還をした。彼はヘンドリック・ドゥーフが商館長を務めており、ヨーロッパでのナポレオン戦争により貿易の途絶えていた1806年から長崎の出島に住んでいた。しかし1813年に彼は、バタヴィアでイギリスの臨時総督に任命されていたラッフルズから蘭日貿易の独占的な権益を守るために、英国船によって出島を離れることになった。オランダ本国がフランスによって占領されたことにともない、東方でのオランダの権益を獲得したラッフルズは、いまや蘭日貿易も手中におさめようとしていたのである。ラッフルズはブロンホフを英国行きの船に乗船させたが、彼がイギリスに到着するより前の1814年に、ナポレオン戦争は終局を迎え、それは同時に英国とオランダの間の敵対関係にも終わりを告げるものとなった。ラッフルズはバタヴィアを離れ、オランダ人が戻り、そしてブロンホフも東インドへ戻った。

1817年に、ブロンホフはドゥーフの就いていた商館長のポストを受け継ぐために、出島に戻って来た。そのことは、長い間オランダ船の到着がなかったあとの1817年にオランダ船が到来した様子として、図1（71頁）に示したような、川原慶賀の絵によって広く知られている。この絵画とその多くの複製は、蘭日の貿易関係についてのひとつの本質的なイメージである、「世界への窓としての出島」を体現するものとなっている。しかしこの絵画は歴史上のある出来事を描写したものである。このときブロンホフは描かれているオランダ船のひとつに乗船している。彼は日本人以外の女性が出島に居住も上陸も許可されていないことを知ってはいたが、このとき妻を含む家族を伴って来ていた。そうした理由を推測するならば、彼は多分、彼の祖国の再編成や刷新の啓蒙的な側面に影響を受けており、そのために日本の当局がその厳格な規制の適用にかんして、より寛大な処置を取るであろうことを期待していたのであると考えられる。なぜなら彼が1816年にオランダを発ち日本に向かったとき、オランダの政治家やエリートたちは、早い

うちに日本が東方における主要な覇権勢力になり、日本人がその影響力を及ぼす領域において、今後は文明と進歩をもたらすであろうと考えていたからである(Falck, 1812 説、Legêne 1998b:159 より引用)。

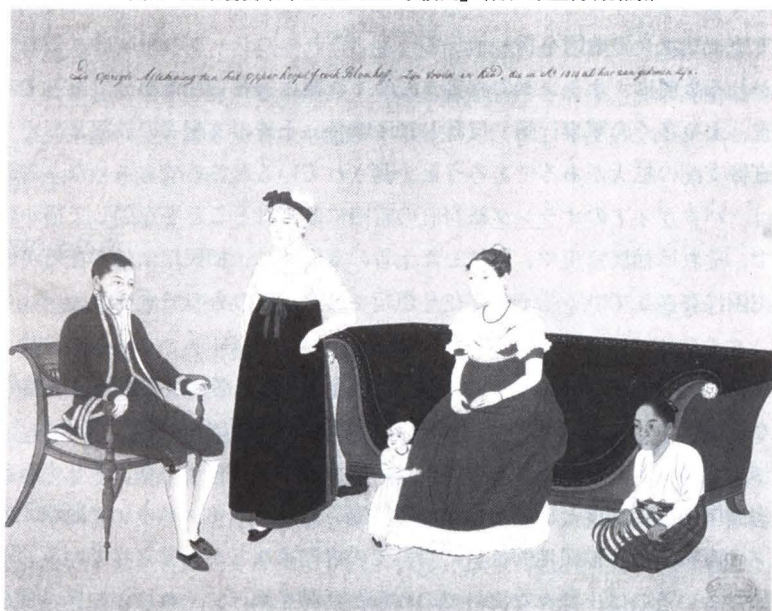
しかしながらブロンホフとオランダの政治エリートは、この点にかんしては誤謬を犯している。ヨーロッパはナポレオン戦争以降、徹底的な変容を遂げたのだが、そのことは日本側の対外貿易に対する態度と鎖国政策には全く影響を及ぼさなかったのである。そのためこの絵画は、ヨーロッパ史の転換期における、日本とオランダの出会いについての静謐な表現となっており、われわれは日本の鎖国政策が終焉に向かう第一歩が表わされているものとして、この絵画を見なすような傾向もある。そして全ての歴史的な出来事がそうであるように、この絵画には歴史上の個人の人間的なドラマも含まれている。神戸市立博物館に収蔵されている、オランダ船の到着を描いたこの絵画〔の衝立〕には、図2に示すが、裏面にブロンホフの家族が描かれている。ここには、ブロンホフとブロンホフの妻ティティア、子供のヨハネスと乳母が、彼らを長崎湾まで運んできたのと同じ船で帰らねばならなくなる前に、みなで一緒に居る様子が描かれている。日本の当局は貿易にかんする規制や、女性の入国にかんする規則を変えはしなかった。そして、オランダ人は、従来どおりの条件でのみ受け入れられたのであって、ブロンホフは一人残り、妻と子供は再び東インドへの航路を辿ったのである。

1817年にブロンホフが二度目に出島に到着したとき、彼は1806年と同じ国を代表していたわけではない。ナポレオン戦争の終結のあと、オランダは共和国から、最後の総督の息子であったウィレムI世を国王として戴いた統一王国になっている。統一王国として、ヨーロッパ列強の力関係のなかで、新たなオランダという国民国家を強化するために、海上覇権の再確立と東西の植民地的な拡大をもっとも重要な政策として展開したこの専制的な拡張主義者の国王の統治により、オランダは近代国民国家としての離陸を果たした。国王ウィレムI世は、オランダの通商的・政治的そして軍事的な権威を回復するために、盟友国の英国が許すところであれば、速やかにオランダ艦船を世界各地に派遣した。東方においては、このことは日本との交易の再活性化、インドネシア島嶼領域におけるオランダの植民宗主国としての地位の回復、そして、通商を主として植民地主義から領土的拡張と直接支配へと徐々に変容させてゆくという結果を生んだ。西方植民地、す



図1 川原慶賀筆「長崎港図」(神戸市立博物館蔵)

図2 川原慶賀筆「ブロンホフ家族図」(神戸市立博物館蔵)



なわちラテン・アメリカにおいては、奴隷貿易は終末に向かったが、プランテーションにおける奴隷制は、まだ潜在的に重要な経済活動であるとみなされていた。北アフリカにおいては、オランダの海上貿易を強化し、国家的な自信と海洋覇権国としての自尊心を回復するために、バーバリイ海岸のオスマン・トルコの海外領土にたいして、オランダ人は軍事力を行使することに躊躇をしなかった。

オランダが近代的な国民国家として形成されてゆくことは、そのもっとも当初の1815年から、ヨーロッパの外での拡張主義的な方針と並行していたと言えるだろうし、その結果、オランダの国家としての形成と、植民地帝国の形成との間には、特殊な関係性が生まれている (Cooper and Stoler, 1997:4)。私はこの帝国の形成を、1819年に描かれた国王ウィレムI世の肖像 (パーリンク [J. Paelinck] 作、アムステルダム国立博物館蔵) に表現されているオランダ国民国家の形成の一面として見る。このような公式の国王の肖像は、国家的統一の重要な象徴である。長崎湾に到着したオランダ船の絵画のように、この国王の肖像も、正装して全ての王権の表象物をまとい、支配者としての本質的なイメージを呈しており、一見では静的に見える。しかしながら細かく見てゆくと、この肖像が歴史的な行為性を伝えるものであることが判る。肖像のなかの国王は、バンタム、パタヴィア、そしてチェリボンの地図を指し示している。これらのジャワの領域は、この肖像が描かれる直前に、オランダの直接支配の下に組み入れられた部分であって、近い将来、より多くの軍事行動、反乱と鎮圧戦争、土着の支配者の放逐と、オランダの直接支配の拡大があるであろうと予測されているところでもあった。この肖像画は、パタヴィアのオランダ総督府の宮殿に飾られることを意図して描かれたもので、それは植民官吏や、服従した土着の支配者に、植民地には不在だが彼らの宗主国に存在している国王の存在を想起させるためのものであった。

残念なことに、19世紀の海外での歴史を扱うオランダの歴史記述は、世界の様々な地域について、多かれ少なかれ専門的な研究領域に分かれているといえる。それは、オランダー日本関係を専門的に研究する学者グループや、スリナムとカリブ海諸国の奴隷制度と植民地主義の専門家、もしくはインドネシア島嶼でのオランダの直接支配と植民地的拡大についての専門家などが、分立している。そこで欠如しているのは、様々な海外での政策と活動を繋げ、それらが相伴ってヨー

ロッパでのオランダ国家の形成の一側面としてオランダの植民地帝国に結実した、「オランダ社会」という観点である。私の主張は、オランダの海外での活動は、オランダ史の付属の一部として見るべきではない、というものである。それはなにか余分なものとして、ヨーロッパ史の「附随的な小事件」として、見なされるべきではない（Van Sas, 1985）。全く逆に、オランダの海外での諸関連は、19世紀オランダの、国家的なアイデンティティと文化の形成と、連続体をなすような部分であると考えられるべきであるという見方を私は提起したい。その意味で、私はエドワード・サイードの論議である、「文化としての帝国主義」という概念、すなわち自己と他者の本質的なイメージのダイナミックスが、この（「文化としての帝国主義」の）プロセスのなかで形成されてきたもので、それが文化的・政治的なリアリティを形作ってきた、という見解を指示するものでもある（Said, 1993）。

オランダが国民国家を形成していく間に、帝国は貿易、軍事的経験、経済そして海外と自国内での社会政策を通じてこの国家のなかに侵入し、それらには思想的な論争、科学的な研究、旅行記、絵画やさまざまな物体（オブジェ）を伴っている。いかにして帝国が、文化的・政治的な意味において、1815年以降オランダに入り込んできたのか、ということを研究するのは、オランダの国家的なアイデンティティと文化を理解するための、重要な前提条件である。日本文化についてオランダがどのようなイメージを抱いていたかということは、このプロセスでの本質的な一部であるのだ。

家族の全体像

そのためにここでは、ヤン・コック・ブロンホフに立ち返り、彼をオランダ社会の日本経験を示す人物として考えて見たい。オランダの様々な海外政策を、国家と国家的な文化の発展に関連させるようなオランダ社会の観点とは何か、という問題を探求するうえで、オランダの上流社会の家族を総体としてみてゆくことで、そのような観点を明らかにしてゆくことができるということを私は見出してきた。ブロンホフが二回目に出島を発ち、1824年にオランダに戻ったときに、彼の愛したティティアは亡くなっていた。彼は、国王にも近く、3人の兄弟たちが王国の海外領土で働いているような帝国の建設者の一族に属する、ミミ・ファ

ン・ブルーヘルと再婚した。3人の兄弟は各々、一人はジャワでの植民地軍での土着兵を訓練しており、もう一人は北アフリカで1816年のアルジェリアでの交戦そして1830年代のトリポリでのカラマンリの陥落に関与しており、さらにもう一人はスリナムで、家族の所有にかかるプランテーションと奴隷を管理していた。ブロンホフがミミ・ファン・ブルーヘルと結婚したとき、彼はコスモポリタンの一族の仲間入りを果たし、彼らのオランダを中心とした世界観に、日本での経験を付け加える準備ができたのだともいえる。この一族は、決して例外的な一族ではなかった。政治的なエリートのあいだでは、このように植民地貿易に関与することと、オランダの海外での政策に貢献することは、一般的なことであった。

ブロンホフとファン・ブルーヘルの一族の研究は、近代国家形成の初期段階において、オランダ社会が本国で、海外での経験を他文化のイメージへと翻訳してゆく際に働くメカニズムを探求するための比較研究をおこなうための私の調査の格好の初発点となった。ブロンホフのように、全てのファン・ブルーヘルの兄弟たちは国王ウィリアムI世から、新しくできた文化的な研究機関とも言える王立骨董陳列室 (het Koninklijk Kabinet van Zeldzaamheden) などへの、海外からのコレクションを集めるようにとされていた。彼らはそのために、手紙やパンフレット、本を書き、オランダ社会の発展についての見解を述べ、海外での文化との比較をおこなったのである。

最初に私が比較を試みたい点は、バーナード・コーンによる植民地的な知識の構築という概念に刺激されたものである (Cohn, 1996)。それは、これらの兄弟たちはどのようにしてそれらの海外諸国に住むようになったのか、そして、各々の関連する社会について、彼らは実際に何を知ることが可能であったのか、という点である。私は、そもそも彼らがその海外の寄港地に到着した時点で、彼らはどのような期待を持っていたかを分析し、すでに彼らが本国での書物や絵画、そして珍しいコレクションなどから多分彼らがすでに持っていたであろう彼らの海外での領地についてのイメージと知識を分析した。そして、彼らの海外での移動可能性 (モビリティ)、すなわち交通の手段とどの程度彼らが現地人に依存していたかを調査した。また彼らの居住環境を再現し、彼らの衣服に関する日常的なあ

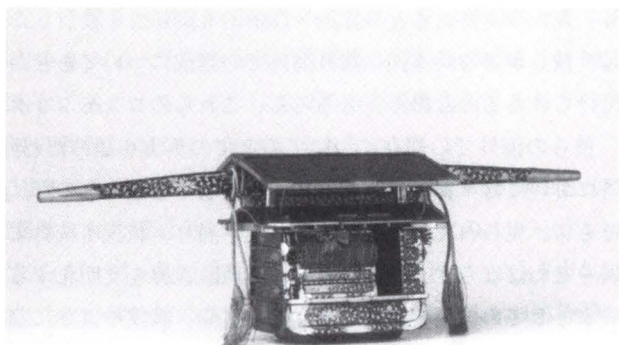


図3-1 ノリモン（駕籠）の
模型（長さ34cm）（ライデ
ン民族学博物館蔵）

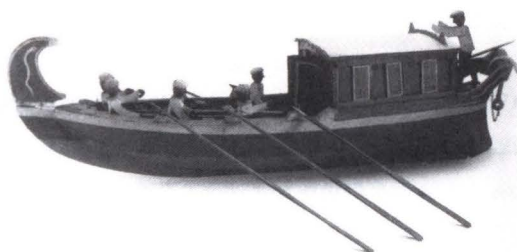


図3-2 スリナムのテント・
ボートの模型（長さ75cm）
（熱帯博物館蔵）

図3-3 北アフリカの馬の鞍
（木製、34×40×41cm）
（ライデン民族学博物館蔵）



り方を追求し、友人や女性たちとの知的・感情的な関係性を検討した。これらの経験と状況は、彼らがある時本国に帰り海外での達成についてあとから物語るときに、関連付けられるものなのだ。もちろん、これらのコスモポリタンな帝国建設者たちは、彼らの海外での滞在についての全ての真実を語ったわけではない。彼らは、海外においては「舞台上上がっている」ようなものなのだ。彼らは見る側であるとともに、見られてもいる。彼らは文字通り、状況を統御するための方途として芝居をせねばならず、彼ら自身も、非西欧世界を文明化する使命を帯びた帝国の建設者としての自信と、異なる文化や気候、病気や言葉に適応せねばならない異邦人としての不便さや恐れ、当惑するような混合を経験してもいた。これらの帝国建設者たちが、みな自らの交通の手段としたもののミニチュア模型を持ち帰ってきていることは、偶然とは言えない（図3、75頁）。日本の「ノリモン（乗りもののこと、ここでは駕籠）」の銀の模型、奴隷によって漕がれるスリナムのテント・ボートの木製模型、北アフリカで使われる本物の木製の馬用の鞍が、かれらが本国へ持ち帰ったコレクションには含まれている。これらがひとたびオランダに持ち帰られると、これらのおみやげ物は、異文化接触の本質的なイメージへと転化する。これら自体は、これらのものそのものには不可視の乗客であって、そこからその国を見てきて、同時に見られていた、その所有者を指し示すのである。他者たちがブロンホフの「ノリモン」をかつぎ、また別の他者たちは北アフリカでは権勢を持つオランダ領事の馬をなずけ、スリナムの奴隷所有者たちのボートを漕ぐ。そのように、これらのオブジェは媒介物となって、接触の現実の契機を形成してゆく。

ブロンホフは、窓が閉じられ、道程があらかじめ決められていた道のりを、彼の「ノリモン」で運ばれた。私が驚きを受けたことは日本での経験に関する限り、反復性である。ブロンホフのようなオランダ人が見るもの、そして、見るべきであると期待されているものの、正規の規範があたかも存在するようである。出島で働いていたものたちは、彼らの先達たちの書き残したものを繰り返し読むように、そして日本人たちがオランダ人たちに説明する規則を遵守するように、指導されていた。オランダ人たちは江戸までの同じ道のりに沿って、何回も何回も「ノリモン」で旅行しており、それはあたかもかつてケンペル（Kaempfer, 1733）が書き記した初期の経験をなぞり、繰り返すものであった。書物に記されたこと

から知りえたことを繰り返すなかで、実は彼らは、日本が鎖国をしている、神秘的な国であるというイメージを繰り返し再構築していたのである。神秘的という観念は、実際のところ、オランダの日本での商業活動に対する日本の実質的な支配権の、鏡に映り反転したイメージなのである。

1977年に吉田憲二とジョン・マックによる、大阪の民族学博物館とロンドンの大英博物館で開催された展示会とそのカタログ『異文化のイメージ』は、いかにして、ある文化の人々が、他の文化を「凝視する」のか、という点に強調点を置いている。この二つの博物館の共同プロジェクトでは、各々の博物館コレクションのなかに、日本とイギリスでの他者に対する対抗的なイメージを、残された「交錯する視線」のなかから追跡するという試みがなされていた（Yoshida and Mack, 1997:42）。私はこのアプローチを好ましく思っており、ここでは彼らの使用する「交錯する視線」という概念に加えて、「接触」という概念を付け加えたい。私にとっては、この見ることと見られることの複合的な総体、表象することと自己表象の相互性がコレクションのなかに跡付けられることは、ブロンホフの部下たちによって出島で実際に演じられた演劇を描いた絵画（出島俄芝居図、ネーデルランド演劇研究所及びアムステルダム市立公文書館蔵）によって、よく表されているように思う。この絵画は多分川原慶賀のものであると考えられるが、小さな人工島であり、真の「接触の場」（Pratt, 1992）として見ることでできる出島で、日本人の観客に向けてオランダ人が演じたオランダの演劇の、日本人による解釈である。

収集すること：接触・強制そして支配

この演劇に関する絵画について語る面白さは、ほかのオブジェと同様に、ある種の相互性と接触にある。1815年以降、非西欧文化からのオブジェは、新しくできた博物館などのオランダの国家機関に暖かく迎え入れられた。国王ウィレムⅠ世は、オランダ国内で、オランダの国際関係を表現することを可能にするために、ブロンホフのような人物に珍しいものを収集することを大っぴらに要請していたのである。

これらのオブジェは、一般にはオランダ人であるが、相異なる収集家の地位や、それぞれに関与した社会など、様々に異なる状況下で収集されたものである。オランダ人たちは、日本ではあまり歓迎されてはならず、渋々受け入れられている

という状況にあったということは知られていた。トリポリでは、他のヨーロッパの列強と共に、軍事的な強制手段と、金融的な介入で、自らの道を開いていた。スリナムにおいては、現地の植民地社会は完全にオランダ人の支配下にあるかのように振る舞い、暮らしていた。日本でのようにやっと許容されるというレベルから、スリナムでのように完全に支配するというレベルまで、これらの異なる接触と遭遇の様式は、ファン・ブルーヘル一族の者たちが本国に持ち来たらせた各々のコレクションの構成にも、大きな影響を及ぼしている。これらのコレクションは、それが収集された当時のオランダと当該の外国とのあいだの、特定の政治的な関係性を考慮に入れずに、真価を計るわけにはいかないものである。しかしながら、ひとたびそれらがオランダに到達し、公的・私的な機関に収蔵されると、本来ならばこれらのオブジェ群が証言を与えるはずだった、様々な出遭いにまつわる、微妙で捉え難い感じというものが、視野から一切捨て去られてしまうのである。収集家たちの手元からこれらのオブジェが伝承され、「博物館入り」になった時、それらのオブジェはそれら自身で根拠を示すだけのものになってしまうのである。そのようにしてそれらは、オランダとその他の異文化との、本質的な文化的差異の感覚を示すことに貢献している。

これらのことについて、本稿では以下で、いかにして公的なコレクションの中にある海外からのオブジェの解釈が、オランダの帝国主義的文化の発展を解釈する上での鍵を提起できるかということを示したい。ここで論じる例は、ブロンホフと、ファン・ブルーヘル兄弟のうちのひとりの、女性に対する態度である。

日本の家庭生活とオランダ人観察者

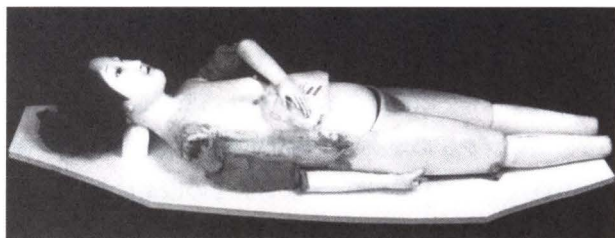
厳しい制限があったにもかかわらず、オランダ人商館員たちと日本人の交渉は、なかり濃厚なものだった。ナポレオン戦争によって19世紀の初頭には貿易関係はほとんど存在しなかったにもかかわらず、そのころにはやはりナポレオン戦争による影響で、啓蒙主義的な知識と相互の関心の高まりから、出島は真の「接触の場」として、オブジェと知識の交換の拠点であることが明らかになっていた。オランダ商館長ドゥーフによって、一群の日本人の通詞たちと蘭日辞典をつくるという大きな知的プロジェクトが立ち上がっていることが、このころの情報の知的交換の例としてあげられる (Pratt, 1992:6; Bitterli, 1989; Doeff, 1833)。

通商が低調期であるにもかかわらず、知的な意味で相互に関心の高まりをみせたこの状況の結果として、ブロンホフがオランダ王室の骨董陳列室のために日本からのコレクションを収集するという企図は、彼の日本での同役たちのあいだでも、高い反響を巻き起こした。その結果として、ライデンの国立民族学博物館のブロンホフ・コレクションは、集められたオブジェそのものの質のみならず、そのコレクション全体が、真の意味で、日本文化の日本による表象を形成しているということからも、現在でも非常にユニークなものとして知られている。このコレクションは、1825年に合計3万ギルダーでオランダ政府に購入されたものであり、吉田とマックの『他者のイメージ』が指摘するように、このライデンの日本コレクションが、近代的民族学博物館のために収集された最も古い民族学的コレクションに属するというのは正しい（Yoshida and Mack, 1997:43-44）。このことについて、ひとつ重要でユニークな点を付け加えたいのは、このコレクションが、日本人にとっては異邦人である観客に見せるために、日本人自身が自己表象した好例でもある、という点である。

ブロンホフが収集した多くのオブジェのなかに、1821年に取得されている一家族分の人形がある（図4、80頁）。ブロンホフは、オランダでの観衆にたいして、日本人の普段の在り方のイメージを与え、彼らの家庭生活を強調するために、このコレクションを注文している。日本人は彼らの故国を離れることは許されない。その意味から、この張り子の人形の一家は、オランダへの日本からの最初の大使でもある。これらは全てまとめて展示されるように意図されたもので、親密であり同時に正式な展示のシーンでは、畳のうえで正座できるようにできている。同様に、子供をあやすところ、おしゃべりをしているところ、煙草を吸ったり、酒を飲んだりするシーンにも、対応できるようになっている。この家族の人形は、2,000にのぼるオブジェの一部であるのだ。ブロンホフは、このコレクションについて、様々なノートを書き記しており、そのなかで彼は、彼の知りうる限りの日本での社会生活のこと、たとえば出産やそれに関連する儀礼、お茶の作法、家族でおよび日本の公的な場での様々な祭礼についてなどを論じている。そのなかのひとつの記述では、日本では女性・男性のために様々な着物があり、それらが日本社会での地位や階層に反映していること、そしてなぜ日本の支配者は、オランダからの献上物に対して、伝統的に大量の布類で返礼を行うのかを説明してい



図4 日本人の人形(張り子、
一家族5人〔男性、女性、男
児、女兒、赤子〕のうち、
女兒と赤子と女性(女兒
52cm、赤子45cm、女性は
「等身大」)(ライデン民族学
博物館蔵)



花様 (かびたん様) 宛てられた手紙の一部
 (オランダ国立公文書館蔵)

図5 「花」から「か
様 (かびたん様)」
(ブロンホフ) に宛て
られた手紙の一部
(オランダ国立公文書
館蔵)

る。

これら未刊行にとどまった記述を読んだ私たちに強い印象を与える点は、ブロンホフの前後に出島に住んだことのある彼の同僚たちの出版物にも表れていることだが、これらのオランダ商館員たちが日本の女性たちにたいして抱いていた高い崇拜の念と賞賛の声である。彼らは、一夫多妻制がそれほど珍しくはなく、芸者や遊女たちが時には非常に若いころから茶屋で働かなくてはならないのだが、日本社会のなかでの女性の地位がそれほど悪くはないということに強調をおいて書いているときに、それはあたかも暗黙の内に批判されていることに対するような、防御的な口調で述べたてられている。彼らはこの状況にたいして防衛的なのは、彼らの読者たちであるオランダ人にとって、秩序あるオランダ人の家族生活というのは、一夫一妻制の夫婦の単位を最も高い徳と見なした核家族的な構成部分に中心があるということを知っていたからである。ブロンホフの同僚であったファン・オーフェルメール・フィッセルは、日本の習慣を弁護して、1833年には、以下のように書いている。「(日本の) 女性の夫というものは大体にしてよく妾を持つことになっているが、彼女たちは普通は夫に従順なものである。」彼はこれをオランダと比較して書いており、日本での女性は、ヨーロッパでのように、より低い水準の文明のなかに生きてはいない、と結論づけている。

ブロンホフや他の19世紀初期の著者たちが、日本社会と日本の女性について弁護するなかで、オランダの一般読者が持っている見解から、自らを弁護していたのであるということは、信じるに難くない。これらのオランダ人たちは、住居は出島に限定されていたが、日本での家庭生活に参加する機会があった。彼らが仕事上で付き合う日本人の男性たちに加えて、彼らは日本の女性たちと、彼女たちが所属している茶屋にたいしてなにがしかのお金を支払うという条件で、出会うことや一緒に住むことさえ許されたのである。ブロンホフは出島での最初の滞在の期間、「いとはぎ」と呼ばれる女性と暮らしていた。彼はオランダでティティア・ベルグスマと結婚した後も、1817年に彼女の日本への入国を拒否されると、この「いとはぎ」や、他の遊女とも接触を再開している。彼らがどのように関係を持っていたのかを、書かれた資料から解釈するのは簡単なことではない。ブロンホフの文書のなかには、「花」という女性から「か様」(このようにブロンホフは呼ばれていた) への手紙がかなり多くある(図5)。これらの手紙は、彼らの交流と言うものが、とても困難に満ちたものであったことを表わしている。そ

ここには日本の文字があり、断片的なオランダ語での内容のまとめが付記されている、まるで布の縦糸と横糸のようである。

ブロンホフの後に島にいたある商館員は、彼の日記のなかで、「2つのくちびるをもつ辞書」、すなわち、彼を慰め、いくらかの日本語を教えてくれることのできる女性を買うことに決めたと告白している。日本語はオランダ人にとって、大きな困難であった。18世紀の末までは、オランダ人は日本語を習うことは禁じられてさえたのである。ブロンホフの前任者であるドーフ（彼は日本の女性と二人の子供とともに家庭生活を送っていた）が前述の辞書の作成をはじめたときに、彼は当局にたいして、日本のオランダ通詞のオランダ語力の向上のために、これは重要であると説明しなくてはならなかった。もっともこれは彼にとって、ヨーロッパでの日本に対する知識を増やすことが第一の目的であったのだが。

ドーフの日本語は習熟したものであった。彼やブロンホフ、そして他のオランダ人にとっても、島での孤立した生活のなかで、女性たちは慰めを与えるだけではなかったことは確かである。彼女たちは、言葉の秘密をオランダ人たちに明らかにしてゆく上で、決定的な役割を果たしたのである。そしてこの言葉を通じて、女性たちは彼らに、複雑で神秘的な日本社会への、より親密な洞察を、女性の観点から与えることになったのである。

スリナムの奴隷制の社会とオランダの支配

このことを、ブロンホフの義理の兄弟であるガスパー・ファン・ブルーヘルによってヨーロッパにもたらされた、スリナムの奴隷制の社会における黒人女性にたいするイメージと比較して見よう。日本と同様にスリナムでも、女性たちは、オランダ人のために仲介的な役割を担うと思われていた。しかしスリナムでは、女性たちは奴隷として、完全に彼女たちの主人に従属していた（図6の人形）。ガスパー・ファン・ブルーヘルは、1824年に、奴隷所有者としてスリナムを訪れ、奴隷たちの自立した、そして仲介的な役割を見出だしている。自立的な面とは、彼がスリナムの農園での「バンジャ」に参加したときに見たものである。「バンジャ」とは、アフリカ系スリナム人による、ダンスと太鼓の儀式で、時には数日間にも（実際に彼が見たものはそうだったが）およぶものである。ファン・ブルーヘルによると、「バンジャ」は特別な客人としての彼に捧げられることではなかったが、すぐに音楽とダンスは、彼の理解できないような別の状態に入って

いった。彼が記しているところでは、女性たちは「見本帳」のような着物を身にまとい、彼女たちのスカーフをなびかせ、男たちは気が狂ったように太鼓をたたき、身体を動かし、ばかげたり怖がったりするポーズを真似ていた。そしてそれは昼夜を問わずに続いたのである。良心に満ちた奴隷の所有者として、彼は踊る人々にかがり火を与えており、明らかに彼はこのトランス・ダンスに強い印象を受けている (Legêne, 1998a)。

ダンスの後に、ファン・ブルーヘルは奴隷たちに、ダンスの時や他の特別な機会の衣装を着せた、6体の人形を作ることを依頼している。スリナムやその後のオランダでの彼の私的・公的な著述のなかで、ファン・ブルーヘルは奴隷の文化にたいして、しばしば拒絶と賞賛のあいだを揺れ動いているように見える。私的な面では、彼は奴隷たちの「すばらしい音楽」について書いている。しかしながら公的には、奴隷たちの騒音や迷信、自尊心や頑迷さを拒絶している。私的な面では彼は好奇心に満ちた若者であり、公的には、博愛主義的な奴隷所有者であったのだ。

この二つの姿勢は、黒人の人形に対する彼の実用主義的な解釈で、折衷されている。彼がこの人形を最終的に植民地博物館に寄付するときに書いているなかでは、この人形を見ると、黒人の女性が好む種類の布について、はっきりとした理解が得られるとしている。奴隷たちは一年に一度、新しい布と彼ら自身が使うための家事のためのものをもらえることになっていた。ファン・ブルーヘルは、この地にすむようになって数年の後に、奴隷たちにオランダから何を与えたらよいのか、奴隷たちにとって何が適切なものとして相応しいのであるのかという事を確信するのに、大変困るようになっていた (図7、83頁)。ここで彼の残した記述のなかに、私たちは文化が交錯するさいの困惑の縦糸と横糸が織り成す、微妙な綾をみることができる。彼は、奴隷の名前と、労働階層のなかでの彼らの地位と年齢に応じてその各々が受け取るべき品々とその量について、書き残しているのだ。もちろん、ファン・ブルーヘルは、彼の人形に着せられていた精妙に飾られた生地を、奴隷たちに与えたわけではない。その代わり、「黒人リネン (Negro-linen)」と呼ばれる、オランダで生産されていた西インドの奴隷たちのための、粗いチェックの生地を与えている。きれいな服を着せられた人形は、奴隷所有者に、奴隷の理想的なイメージを与えるものであり、また同時に、慈善に満ちた不在奴隷所有者としてのファン・ブルーヘル自身を暗に指し示し、さらに本

国での友人たちに、彼の奴隷がどのような服をまとっているのかを誇らしげに見せている、ということも暗示させるものである。このような人形は、オランダ社会での、奴隷の「不可視性」を強めることに貢献している。実際に彼の奴隷たちは、ボロ布をまとっただけで、コーヒー農場での強制労働に従事していたのだ。黒人女性の自立したあり方については、この辺にとどめておくことにして、以下では彼女たちの媒介者としての役割について述べよう。これらの人形は、奴隷制の農場での奴隷の生活を理想化していただけてはいない。この人形は、ファン・ブルーヘルファン・ブルーヘルの奴隷労働と労働関係についての見解を隠蔽している。その観点では、彼は計算高い奴隷所有者である。彼の私的な記録には、農場で働く黒人と、家の中で働く白人と黒人の混血者との分業や、さまざまな肌の色およびこの植民地社会にやってきた系譜に基づいた、多くの地位のバリエーションについての多くの観察が記されている。それらのひとつの中で、ファン・ブルーヘルは本国の他の不在奴隷所有者・農園所有者に向かい、ヨーロッパ人は、夫婦で農園経営をするのはよくない、と論じており、それよりも、白人の男性がひとりで、白人と黒人の混血のメイドを妾として住むほうがよい、としている。なぜなら、その妾を、手なずけにくい農園の奴隷たちのあいだでの、主人の「耳と目」とすることができるからである、というのである。

このようなファン・ブルーヘルの見解では、奴隷を既得権や肌の色の差異、そして強制力をもって、階層に分割する、すなわち「奴隷の分割統治」という方針のなかで、植民地主義的な人種主義・性差別主義の政策が明らかに表現されており、それらが感情的・倫理的な見解などを全く含まないかたちで、理性的な経営戦略として、展開されている。ここでもまた、日本での事例と同様に、オランダの一夫一妻制の核家族は、オランダ人の海外での行為や開発政策の上で、倫理的な基準を与えるものではなかったのである。しかしながら、日本とスリナムで、それがそうであった理由は、各々の社会のなかでおかれていたオランダの立場、つまりオランダ人が存在することが、社会的になんとか認められていた日本と、民衆と国家を完全に統治していたスリナムとでは、全く異なっている。これらの異なる観点から、他者のイメージ、さらに他者の女性のイメージは、オブジェのかたちでオランダに持ち帰られ、さまざまな見方や経験は、人種についてのあるひとつの言説を形成することになるのである。

展示され解釈されるオブジェ

日本の家族の張り子の人形は、日本での家族生活の静謐なる演示として意図されたものであったが、これがひとたびオランダに到着すると、これらは日本人についての格好の骨相学的研究標本として扱われることになる。そうして、この家族の人形は、18世紀の末ころからおこなわれていたような、科学的な人種の分類研究のなかで、重要な役割を果たすのである。この過程で、彼らの着用していた着物は剥ぎ取られ、着物は着物として別のコレクションとともに分類收藏されることになる。しかしながら、日本とオランダには特別な関係があること、そして、日本が高い文明度を示すとされた多くの「証拠」があるとされたことなどから、他者性と人種にかんする言説は、日本にかんする限りは、ヨーロッパの優越性という言説にはならなかった。このことは、19世紀にオランダで展開されることになる人種についての言説に影響を及ぼすようになる。しかしそのときには、博物館の収蔵庫に収められた張り子の人形の家族は、着物を失っただけではなく、1854年以降のオランダの持つ日本にとっての特別の立場が無くなるとともに、その意味あいも失ってゆくことになる。これらのコレクションは、収蔵庫の奥深くに埋もれ、博物館としてはそれらを再度展示するような理由もなくなるのである。

アフリカ系のスリナム人の存在を示す、スリナムの人形もまた、オランダに到着したとたん、プランテーション社会での奴隷所有者としてのオランダ人の存在との関連性を失う。これらの人形は、オランダの子供、特に少女たちのためのおもちゃになる。奴隷社会との関係性が失われただけではなく、これらの人形を作らせた白人の主人と、黒人の召使いとの関係も失われる。これらの人形がまとう美しい着物によって、19世紀の奴隷制度のもつ両義性が、すべて隠蔽されてしまったのだ。奴隷は、バンジャの時にはこのように着飾り、そしてそのあとには、彼ら自身の誇りの証しを与えるものとして、主人のためにこのような人形を作る、そのようなストーリーに隠された両義性は、オランダ本国では見出されなかったのだ。実際の奴隷たちはボロをまとっているにすぎないのに、ファン・ブルーヘルは、この人形に着せているような着物は、彼が奴隷に与えたものなのだ、と主張していた。彼がこれらの人形を自分で所有しているうちは、公的な場面で奴隷制やその廃止について、彼が発言することに根拠を与えるものとなっていた。こ

れが植民地博物館で誰の所有物でもなくなると、ただのめずらしいものになる。奴隷の表象ではなく、ただのスリナムの黒人の人形となる。現在のオランダ社会での、黒人コミュニティの文化的な根源と奴隷制時代からの伝統についての論議のなかで、これらの人形は新たな意義を持つようになっている。それは、19世紀の初期、ファン・ブルーヘルが訪れたころのプランテーション・コロニーに起源を持つ、スリナムのクレオールのコット・ミッシ（Kotto misi）ドレスの発達についての情報を与える史料として、注目されるようになっている。

博物館にあるコレクションの外国人についての、これら2つの対照的な表象（自己表出とともに、非表象も含めて）は、私の議論を進めるための一例として、挙げられたものである。私の研究は、オランダの帝国主義的な文化（この場合には外国の文化についての見方に映し出された、オランダ人の女性やジェンダー、そして人種に対する見方）が如何にして形成されてきたかということを追求するものであって、それに答えてゆくには、これらのコレクションのコレクターたち、そしてコレクション活動がなされたときの条件や状況を調査することから、なんらかの鍵が与えられるものであると考えられている。オランダが国民国家として形成されてゆくときに、海外での経験と海外生活を送った者たちがどのような役割を果たしたのかということのあいだに、どのような相互作用があったかということの別の例としては、オランダでの自由の概念の発達と、人々を文明化するために強制力を使用することの関係を探ることが考えられる。モンテスキューの「法の精神」と政治理論についての多くの著作は、日本は度々にわたって、同時代での専制的な支配の例としてとりあげられている。しかしながら、日本を訪れたことのあるブロンホフやその同僚たちは、この分析に対して日本を弁護する側に立ち、たとえば女性の地位が低いと想定されていることなどに反論し、いわゆるこの専制的な圧政の結果として、安全で安定した社会関係が保たれていること、そして住民たちにとって社会システムが透明性を持っている点などを主張している。彼らはこれらのことを、土地と仕事を失い、慈善事業によって生活をしていた新たな貧困層を生んだ、オランダでの貧困と社会不安と対比させている。ブロンホフの義理の兄弟であるガスパー・ファン・ブルーヘルは、このようにオランダでの新たな土地なしの都市貧民層の出現の状況をめぐる論法を用いて、スリナムでの奴隷制を擁護している。彼によると、奴隷は所有者の庇護の下で安全

であり、彼らの解放はオランダが経験している土地なし貧民層の出現と言う困難を招くものである、とされているのだ。

このように日本の統制のとれた社会とスリナムの奴隷制社会、そして、商業と農業を中心としていたところから工業化へと遷移しつつあったオランダ社会は、帝国の建設者の単一の、しかも同等の思着せがましい言説のなかで、連動していた。彼らにとって、自由とは相対主義的な概念であり、強制労働のもたらす快適な安定性と並べられるものであり、全面的な自由の不安定性に、対置されるものでもあった。このように複雑な言説構成のなかで、オランダ人エリートたちは、強制労働によって土地なしの貧民層に訓練をあたえる施策を支持し、自由主義的な憲法を採択したにもかかわらず、その後15年間たった1863年まで、奴隷解放を遅延させている。実際のところ、さらに同様の言説が、彼らにジャワで植民地を開発するための強制労働を導入することを許してもいたのである。

訳者あとがき

本稿は、1999年11月19日から21日にかけて、京都・国際日本文化研究センターにて開催された、「日蘭関係400年の歴史に関するシンポジウム (Symposium on four hundred years' history of Dutch-Japanese relations)」(芳賀徹氏・吉田忠氏が座長)にて発表されたものの邦訳である。本稿の原題は、「Japan in the nineteenth-century Dutch culture of imperialism」であり、オリジナルは口頭での発表だったために、読み易さなどを配慮して、訳文には若干の修正を加えた。

執筆者紹介からもわかるように、著者スーザン・ルジェーネ氏 Susan Legêne は、現在アムステルダムの王立熱帯研究所 (Koninklijk Instituut voor de Tropen: 日本では熱帯博物館としても知られている。旧植民地博物館)の主任学芸員として活躍している気鋭の若手である。同氏は1998年に博士号を受けており、浩瀚な博士論文である、*De bagage van Blomhoff en Van Breugel: Japan, Java, Tripoli en Suriname in de negentiende-eeuwse Nederlandse cultuur van het imperialisme* (1998)は、アムステルダムの熱帯研究所の出版部 (KIT Press, Amsterdam) から刊行されている。この博士論文の題名は、『ブロンホフとファン・ブルーヘルの手荷物：19世紀オランダの帝国主義の文化のなかの日本、ジャワ、トリポリとスリナム』であり、文字通り、19世紀のオランダ文化のなかで、いわゆ

る帝国主義的な視点から、日本、ジャワ、トリポリおよびスリナムがどのように見られていたのかを、ブロンホフとその義理の兄弟たちであるブルーヘル兄弟の史料を駆使し、論じているものである。今回ここに訳出した本論は、この論文に基づき、ブロンホフに焦点をあてて発表用に改稿されたものである。この研究をはじめるとあって、ルジェーネ氏はオランダ各地の博物館に収蔵されている史料を調査する、物質文化論(studies of material culture：日本では民(俗)具研究などとも言われている。)から入ったと話しており、ある意味でオランダに残存する19世紀の民族・民俗学についての史料研究の、ひとつの到達点が示されていると考えられるだろう。

しかし本論を一読されれば一目瞭然のように、ルジェーネ氏の研究はいわゆる史料の博搜や実証研究のみにとどまらない。いわゆる史学的な実証的な研究に加えて、それら史料を歴史的文脈に位置付ける、本格的な「歴史」のストーリー・テリングに果敢に挑戦している。つまり、はたしてその「史料」の意味は何だったのであろうか、どのような歴史的文脈のなかで、その「史料」は、どのような現実のアクチュアリティを持っていたのだろうか、と言う点を問い直すものとして、各界から注目を集めている。日本でも史学、また蘭学の研究は様々に展開されているが、ルジェーネ氏の指摘を正面から受けとめ、意味のある議論を交換してゆけることを期待したい。例えばオランダ商館員のジェンダー的な問題に関する記述を分析する枠組みなどは、従来のヒストリオグラフィーがかなり男性中心的な記述でしか論じられてこなかったために、「出島を通じて見たジェンダー」という新たな問題設定がなされたものと考えられる。このように、新たな視角を切り開いてくれるものであると考えられる本論文で提起された内容に、従来の日本史学での蓄積が、どのくらい答えてゆけるのかがわれわれにとっての今後の課題であろう。

タイモン・スクリーチ氏をはじめとするヨーロッパの文化研究の若手たちが、日本史研究、そしてわれらが蘭学研究の領域を縦横無尽に駆け巡りだしている。その状況を目の当たりにして、知的世界においてかつてあった静謐を懐かしむことは、マナー違反であろう。スクリーチ氏に並んで登場してきたルジェーネ氏を、知的な礼節をもって迎えることは、知的な越境を戒め、かつての静謐を取り戻そうとすることではないはずだ。むしろわれわれは、越境者によって明らかになった自らの限界を真摯に受け止め、様々な差異を、再び属領化

しようとする知の游躍に身をゆだねるべきであろう。まさにわれらが習うべき先達の、「蘭学者」たちが、かつてそうであったように。

なお、ヤン・コック・ブロンホフの正しい姓はコック・ブロンホフであるが、著者の用例に従ってコックを省いた。

引用文献

- Appadurai, A. (ed.) *The social life of things. Commodities in cultural perspective*. Cambridge, 1988.
- Bitterli, U., *Cultures in conflict. Encounters between European and non-European cultures 1492-1800*. Cambridge, 1989.
- Brugel, G.P.C. van, *Dagverhaal eener reis naar Paramaribo en verdere omstreken in de kolonie Suriname*. Amsterdam, 1842.
- Clifford, J., *The predicament of culture. Twentieth-century ethnography, literature and art*. Cambridge/London, 1988.
- Cohn, B.S., *Colonialism and its forms of knowledge. The British in India*. Princeton, 1996.
- Cooper, F., and A.L. Stoler (ed.), *Tensions of empire. Colonial cultures in a bourgeois world*. Berkeley/Los Angeles/London, 1997.
- Couperus, L., *Nippon*. Amsterdam/Antwerpen, 1992 (first published in 1924).
- Doeff, H., *Herinneringen uit Japan*. Haarlem, 1833.
- Hesselink, R.H., *Twee spiegels op Cambang. Een portret van de Japanners in de negentiende eeuw naar Nederlandse ooggetuigenverslagen*. Utrecht, 1984.
- Hoogbergen, W. en M. de Theye, 'Surinaamse vrouwen in de slavenij.' In: J. Reijs, E. Kloek e.a. (red.), *Vrouwen in de Nederlandse koloniën. Zevende jaarboek voor vrouwengeschiedenis (1986)*. Nijmegen, 1986, pp. 126-151.
- Kaempfer, E., *De beschrijving van Japan...* Amsterdam, 1733.
- Lehmann, J-P., *The image of Japan. From feudal isolation to world power, 1850-1905*. London/Boston/Sidney, 1978.
- Legêne, S., 'From brooms to oeah and back. Fetish conversion and border crossings in nineteenth-century Suriname.' In: P. Spyer (ed.), *Border fetishisms. Material objects in unstable places*. New York/London, 1998a, pp. 35-59.
- Legêne, S., *De bagage van Blomhoff en Van Breugel. Japan, Java, Tripoli en Suriname in de negentiende-eeuwse Nederlandse cultuur van het imperialisme*. Amsterdam, 1998b.
- Legêne, S., 'Nobody's objects. Early 19th-century ethnographical collections and the formation of imperialist attitudes and feelings.' In: *Etnofoor*, XI/1/1998, pp. 21-39.
- Oostindie, G., *Roosenburg en Mon Bijou. Twee Surinaamse plantages 1720-1870*. Dordrecht, 1989.
- Overmeer Fisscher, J.F. van, *Bijdrage tot de kennis van het Japansche Rijk*. Amsterdam, 1833.
- Pratt, M.L., *Imperial eyes. Travel writing and transculturation*. London/New York, 1992.
- Said, E.W., *Culture and imperialism*. New York, 1993.
- Sas, N.C.F. van, *Onze natuurlijkste bondgenoot. Nederland, Engeland en Europa, 1813-1831*. Groningen, 1985.
- Stipriaan, A. van, *Surinaams contrast. Roofbouw en overleven in een Caraïbische plantage-economie, 1750-1863*. Leiden, 1993.
- Taussig, M., *Shamanism, colonialism and the wild man. A study in terror and healing*. Chicago/London, 1987.
- Yoshida, Kenji, and John Mack, *Images of other cultures. Reviewing ethnographic collections of the British Museum and the National Museum of Ethnology, Osaka*. Osaka, 1997.